

第一問 左は、広瀬友紀『ちいさい言語学者の冒険』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

ぶぶ漬け伝説^{〔注〕}

京都で、ホウ問先のお宅でさて帰ろうかという時に、そこのご主人に「ぶぶ漬けいかが？」と言われ真に受けたらどうなるか——有名な「ぶぶ漬け伝説」はご存じですよ。では、ご近所さんから次のように話しかけられた時の正しい答えは？

「お宅のお坊ちゃん、ピアノ上手になりましたね」

「いや〜それほどでも♡」は不正解！ そう、正解は「ご迷惑をおかけしています」。

このように大人は、直接コトバにすると

A1

しまいそうなメッセージでも上手にやりとりする術を持っています。

人類はそれを発達させすぎてしまったのでしょうか、私たちの周囲には「コトバの意味そのまま」でないやりとりが満ちています。だけど、子どもたちは果たしてそうした術を使いこなせているのでしょうか。

子どもに通じるか

子「今日セブニーイレブン行く？」

母「今日は買うものないんだよ」

子「…今日セブニーイレブン行く？」

これは、セブーンイレブンに行きたいK太郎（3歳）です。大人だったら、「今日は買うものがないんだよ」と相手が答えれば、「だから行かないんだ」と答えているのと同じだと理解するところですが、彼にとっては「行く？」と尋ねた以上、「セブーンイレブンには行かないんだよ」と言ってもらわない限り、質問に答えてもらったことにはならないのですね。

子どもの言語習得の研究では、「直接的な表現」（例…「セブーンイレブンには行かない」）を理解した後の段階としてはじめて、ことばの表面的な意味とは異なる間接的な表現（例…「今日は買うものがないんだよ」は「行かない」ということ）を理解する段階に達すると言われています。

そうした間接的な表現を子どもは何歳ごろから理解できるのか、という問いに関しては、多くの言語で昔からたくさん調査がなされてきましたが、おおむね、7歳ごろになると大人と同じような理解ができる子が多くなると言われています。7歳以前では、「3歳でも間接的な表現が理解できる」「いや、4〜5歳までは難しい」「5歳でも難しい」などいろいろな報告があります。具体的にどのような表現を対象に、どのような方法で調べているかによって、結果がばらばらついているようです。

こんどは、先ほどのK太郎が、6歳になってからの会話です。

B 1
B 2

（そのすこしあと）

B 3
B 4

母はたまごやきは食べなくていいなんてひとも言ってますが…。子どもは全体の流れ（とくに、「じゃあ××は食べなさい」との対比）から、たまごやきは食べなくていいという間接的なメッセージを（都合よく）見いだしていますね。やるじゃ

ないか6歳児と言いたいところですが、まあ世の中そんなに甘くない、しっかり完食させました。とはいえ、「この子の解釈も一理ある…よな…」とってしまった母でした。

ことばにしていることがどうして伝わるのか

ことばによる表現が、直接的な、ことば通りの意味だけでなく、間接的に別の意味を伝えることによって、話し手にとっては使える表現の幅が広がることになります。だけど、聞き手にとってはどうでしょう。今の話し手の表現が、ことば通りの意味なのか、あるいはそうでない、間接的な解釈が求められているのか、どのように区別すればいいのでしょうか。

言語学でいうとこれは「語用論」という分野の問題です。ことばの知識の「実践編」といったところでしょうか。

語用論の入門書で必ず言及されるポール・グライスという哲学者・言語学者は、文字通りの意味でない表現がうまく伝わるためのよりどころとして、人間はある一定の相互了解のもとに、コミュニケーションを行っているとしています。この「グライスの会話の公理」とよばれているものを、次に自己流で思い切って短くまとめてみました。

① 原ソクとして、人間が相手に対して何か言うとき、話し手と聞き手が共有している目的（情報の共有や交換）を達成しようと会話するものである。なので、求められているだけの情報量に意図的に過不足をもたらすことなく（量の公理）、意図的に間違ったことは言わず（質の公理）、話題との関連性からいたずらに逸脱することもなく（関係の公理）、意図的にわかりにくい表現をあえて用いることもない（状態の公理）と、お互いに期待してよい。

逆にいうと、これらの点のいずれかにおいて何らかの明らかな逸脱がある場合、それには根拠がある、と解釈されます。つまり、文字通りの表現以外の意味をそこに見いだしたほうがいいぞ、というヒントであることが、人間の知識には織り込み済みだということなのです。

C

(関係の公理)、何か追及されてことばを濁したり話題をはぐらかそうとしたりする行為だけで、やましいことがあるのだとほぼ伝わってしまう(状態の公理) ことはご存じのとおりです。

それでは、クイズ。右の「量の公理」に関するものです。財布の中に500円持っている人が、「ボク100円持っているよ」と言ったとしたら、この発言は正しいですか、おかしいですか。

500円持っているときに「ボク100円持っているよ」は正しいか

答えは、論理的に言えば正しい(500円持っているということは、100円持っていることを含む)が、語用論的にはおかしい(量の公理に違反)、です。普通、「100万円あります」と言われたら、200万円はないんだな、と理解しますよね。

大人であれば、よっぽど特殊な状況でない限り、普通は「語用論」的に解釈して、たとえば今のクイズには「おかしい」と答えます。ここでの判断の根拠をとくに「尺度推意(または尺度含意)」といいます。尺度関係(大小の程度の違い)がある表現において、たとえば「100円」「少し」「何人か」といった言い方を選んだ以上、それより大きな量の存在はことばの使い方の常識のうえで(つまり語用論的な計算の結果)否定されるというのが「尺度推意」です。

大人はこの尺度推意を理解しているために、「100円と言ったなら200円はない」「少しと言ったからにはたくさんはない」「何人かと言うなら全員ではない」ことを読み取るのです。

E
子どもも大人のような解釈ができるか

子どもたちも尺度推意をふまえ、「こういう状況で普通はこういう言い方はしないだろう」という推論を働かせて、大人のように語用論的な解釈ができるのでしょうか。この問いに対して、ギリシヤ語、ドイツ語、英語など多くの言語で

A2

調査がされてきました。その結果、おおむね、次のような表現(いろんな言語での報告を混ぜて紹介することになりますが、例

は日本語に直しました）は5歳より下の子どもたちにはおおかた「間違っていない」と判断されることが報告されています。

「何頭かの馬が丸太を飛び越えた」（その場にいるすべての馬が丸太を飛び越えたときに）

大人だったら相当違和感がありますよね。

ただ、数字を使ってみると、子どもたちにとってもおかしいと感ずる割合が増えるようです。

「2頭の馬が丸太を飛び越えた」（3頭の馬が丸太を飛び越えたときに）

たしかにもっとウソっぽくなります。

また、「だけ」をつけてみると、大人であればかなり「おかしい」と思えます。

「何頭かの馬だけが丸太を飛び越えた」（その場にいるすべての馬が丸太を飛び越えたときに）

ですが4〜5歳の子どもでは、「だけ」をつけた効果は大人に比べてあまり大きくないという報告もあります。

このように、6歳くらいまでの子どもたちが尺度推意に違反する表現を「おかしい」と判断するかどうかは、ある程度は尺度表現のタイプによりけりであるようです。

さらに、どのような課題をとおして子どもから解釈を引き出そうとするのかという調査方法の違いによって、結果はかなり左右されるようですが、こうした尺度推意に基づいた推論は、7歳くらいでいたい大人と同じように行われるようになる、という観察においては、おおむね多くの報告で一致しています。

相手の心をよむチカラ

人間のコミュニケーションにおいては、相手と自分との間でどれくらい情報が共有されているか、というのはとても重要な前提で、それにより話し手が使う表現や聞き手の解釈が左右されることもわかっています。自分だけでなく他者の認識や知識を才し量るために人間にそなわっている能力のことを「心の理論」といいます。

この能力を測るテストとして「誤信念課題」という方法が知られています。よく知られた例は、実際の課題に用いられた登場人物にちなんで「サリーとアン課題」ともよばれるものです。たとえば、サリーがカゴにビー玉を入れたのち、その場を離れている間に、アンがやってきてそのビー玉を先ほどのカゴから取り出して隣の箱に移した、という場面を設定します。「さて問題です。サリーが帰ってきたとき、ビー玉を探してまずどこを見ると思いますか」と子どもに尋ねると、3歳くらいまでの子どもは「箱の中」と答えることが知られています。4〜5歳から上になると、「いや、ビー玉が移動したことをサリーは知らないはずだ」ということに考えが及び、「カゴ」と答えるようになるそうです。

こうした「F」がそなわってくる年齢は、先ほどご紹介した、ことばの理解において、人間同士の了解事^(注)コウに照らし合わせ、直接表現されていない語用論的な意味を理解する能力の発達が見られる年齢とも重なっていると考えられます。

K太郎は7歳ともなると、母の指示通りにしたくないときにこんな口応えをするようになりました。

「お母さんがそうさせたいからって××しろって言わないで！」

「お母さんが命令していることは、ボクのためでなくてお母さん側の都合だろ！」と言いたいのか。凶星^Gと言いがかりがたいハーフ&ハーフだ！心の理論をマスターすることによって生意気さになりますますます磨きがかかりますのでご用心。

周りの状況をよむチカラ

表現の解釈は、状況によるところも大きいものです。財布の中に500円持っている人が、「ボク100円持っているよ」と言ったとしたら、という問いに戻りますが、これも、漠然と「お金持ってる？」と聞かれて答えるのか、自動販売機の前で財布に30円しかなくて困っている人に対して言う台詞せりふなので、判断は違いますよね。大人になるまでに、私たちは、相手の言うことを、表現そのものから得られる情報のほかに、自分を取りまく「状況」「文脈」も考慮にいった総合的な判断のもとに解釈できようになります。アメリカで出でパンされた子どもの言語発達の教科書にも「今何時かわかる？」という問いかけに、「うん、わかるよ」とだけ答えてニヤニヤ大人の反応を見る、という6歳児の例（原文は英語）が載っています。これは完全に、「この状況では、今何時かを答えてほしい、という意味だ」ということを承知のうえで、A3 大人をからかっているのですね。

心理言語学の分野でもさまざまな手法を用いた実験調査が行われてきていますが、大人と同じように、自分の周りの状況を反映させたくて相手の言うことを理解するようになるのはだいたい7〜8歳くらいではないかと言われています。

なので、そうなる前の子どもなら、お母さんがいくら A4 怒っていようが――

母「もうっ、何回言ったらわかるの！」

子「え…5回…？」（ズッコク）

〔注〕 1 ぶぶ漬け伝説――ぶぶ漬けとは京ことばでお茶漬けのこと。ここでは落語「京の茶漬け」の題材にもなっている

有名な話を指す。「ぶぶ漬けいかが？」という言葉は、客を引きとめる素振りや体裁を整えたり、帰宅の頃合いを知らせたりする意味で用いられる

問1 空欄A1からA4に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

1

a 混乱して

b あえて

c 目を三角にして

d 角が立って

e こぞって

A1

A2

A3

A4

① a | c | e | b

② a | c | b | d

③ d | c | b | a

④ d | e | b | c

⑤ a | b | e | d

問2 空欄B1からB4に入る発話文の順番として、最も適切なものを次から選べ。

2

- a 母「じゃあそのたまごやき、半分だけ食べて」
- b 母「じゃあ他のおかずはぜんぶ食べなさい」
- c 子「たまごやきは食べなくてもいいって言ったじゃん！」
- d 子「もうたまごやき、こんなに食べられない」

B1 B2 B3 B4

- ① d ↓ b ↓ c ↓ a
- ② c ↓ b ↓ d ↓ a
- ③ a ↓ d ↓ b ↓ c
- ④ d ↓ a ↓ b ↓ c
- ⑤ d ↓ b ↓ a ↓ c

問3 空欄Cに入るものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

3

- ① 就職活動中の学生のために書かれた推薦状が、面白い人格とサークル活動の話で終始していたら、学業は優れていないことが、そう書かれていなくても伝わりますし
- ② 資格を取得するための試験で正解とは異なる選択肢を多く選び、合格点に達しなかったならば、その資格にふさわしい能力を持っていないと判断することには妥当性がありますし
- ③ 二人の人間が協力して問題に取り組む際には、お互いの持つ情報や知恵を提供しあうのが重要で、無関係の話題に花を咲かせて脱線する必要はありませんし
- ④ 悪いことをした人が嘘をついてごまかそうとしている場合には、嘘はいけないと遠慮なく注意してあげる方が、信頼関係の構築に有益な場合もありますし
- ⑤ 都合の悪いことを質問されたとき、自分の権威や立場を損ねないために、持って回った話し方でその場を切りぬけるのを常としているような人もいますし

問4 傍線部Dに関する著者の説明として、最も適切なものを次から選べ。

4

- ① 「100円持っているよ」という表現は、500円持っている可能性を否定していないため、語用論的には正しい
- ② 100円という具体的な数字を示している以上、論理的には間違っている
- ③ 「100円持っているよ」という言葉は500円持っているという意味であるため論理的には正しい
- ④ 表現に含まれる情報量に意図的に過不足を生じさせているため、語用論としてはおかしい
- ⑤ 事実に関する誤認に基づいた発言であるため、正しいとも間違っているとも言える

問5 傍線部Eへの答えとして、最も適切なものを次から選べ。

5

- ① 5歳より下の年齢でも、大人のような解釈は可能であり、その判断はおおよそ間違っていないと言える
- ② 表現によって判断に差は生まれるものの、概して7歳になるころには、尺度推意に関して大人と同じ判断が可能になる
- ③ 大人であれば変だと感じる表現でも、数字による情報を付加すると、子どもには正しいものだと感じられる
- ④ 尺度に関する表現さえ追加されれば、どんな子どもも大人と同じ判断ができるようになる
- ⑤ 表現によって多少の差があるとはいえ、大人と同じ判断を下せる力がどんな年齢の子どもにも備わっている

問6 空欄Fに入るものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

6

- ① 自らの推論を発言する自信
- ② ビー玉の移動を認識する能力
- ③ 他者の認識について推論する力
- ④ 尺度推意を加味して判断する能力
- ⑤ 実在しない架空の課題に答える認識力

問7 傍線部Gの意味として、最も適切なものを次から選べ。

7

① 子どもへの指示は親自身にとってばかり都合のよいものだという抗議は、片面の真実を言い当てているものの、こじつけの言いがかりでもあるという両面性を持っているということ

② 親の指示に子どもが逆らう行為は、「お母さん側の都合だろ」という正当な抵抗を背景にしている場合もたしかにあるが、結局は単なる生意気さのあらわれであるため、気にかける価値はないということ

③ 親の指示のうち、親自身の都合によってなされるものは半分しかなく、残りの指示については子どものための思いやりによってなされるため、親の指示に従うのは2回に1回でも仕方ないということ

④ 誤信念課題に答えられるようになる年齢は、直接表現されていない語用論的な意味を理解する能力の発達が見られる年齢ともおおよそ重なっているため、言語認識の発達を考察する際にはこの時期への注目が重要だということ

⑤ 心の理論を身につけた子どもの反抗には、難癖をつけるだけのものもあるが、親の指示が自分ではなく親にばかり利益をもたらすことへの真つ当な反論である場合もあるため、親は子どもの言葉をいつでも肯定し認めるべきだということ

問8 本文の内容と合致するものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

8

① サリーとアンが発見した「心の理論」は、子どもの言語発達について多くの示唆を与えてくれる

② 「誤信念課題」に正しく答えるためには、「心の理論」を積極的に鍛える必要性があると提唱されている

③ 500円を持っているときに「100円持っている」と言うことは、尺度推意に反しているため論理的に間違っている

④ グライスは、人間が一定の相互了解のもとで会話できるようにするために、4つの公理を生み出した

⑤ 自分の周りの状況を反映させて、言外の意図を読み取る必要がある事例の一つとして、京都のぶぶ漬け伝説がある

問9 文中の二重傍線部⑦から⑭のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から選べ。

- | | | | | | | | |
|----|---|---|-----------|---|------------|---|--------------|
| 9 | ⑦ | ① | ホウ給を払う | ② | 裁判をボウ聴する | ③ | 野ホウ図に遊ぶ |
| | | ④ | 歴史を探ボウする | ⑤ | 悲ホウに接する | | |
| 10 | ⑩ | ① | ソク天去私の精神 | ② | 当意ソク妙な答え | ③ | ニソク三文の価値しかない |
| | | ④ | 迅ソク果敢な行動 | ⑤ | 無病ソク災を祈る | | |
| 11 | ⑪ | ① | アツ力をかける | ② | 愛ソを尽かす | ③ | 書類にオウ印する |
| | | ④ | オク測にすぎない | ⑤ | 事態のスイ移を見守る | | |
| 12 | ⑫ | ① | 印刷所へ入コウする | ② | 多コウ式を計算する | ③ | 小コウ状態を保つ |
| | | ④ | 生コウな文章 | ⑤ | 窓のコウ子 | | |
| 13 | ⑬ | ① | 書籍をハン布する | ② | 看バンを掲げる | ③ | ハン用性の高さ |
| | | ④ | ハン忙期を迎える | ⑤ | 木ハン画を売る | | |

第二問 左は、阿部公彦『理想のリスニング』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

皮膚感覚と言語コミュニケーション

傳田^{でんた}光洋さんという皮膚の研究者が『皮膚感覚と人間のこころ』^Aの中でおもしろい説を展開しています。人類は約120万年前に体毛を失いました。それまでは人類は「毛づくろい」を通して互いに快感を与え合いコミュニケーションを行ってきたこと。しかし、体毛を失うことで、人類はこの道具を失ってしまったのです。その後、人類が体毛にかわるものとして言語を獲得したのは約20万年前で、それから現在に至るまで、言葉は人類にとって最大のコミュニケーションの道具となってきました。言葉によって人類は互いに愛撫^{あいぶ}し、抱擁し、慰め合ってきたのです。しかし、体毛を失ってから言葉を得るまでの100万年の間、ヒトはいったいどうしていたのか？そこで大きな機能を果たしていたのが、コミュニケーション装置としての皮膚だった、ということです。

この仮説には、二つの興味深い点がからんでいます。一つは言語によるコミュニケーションが、一種の愛撫の役割を果たしているということ。これはすでに多くの人が多かれ少なかれ認識していることですが、あらためてそれが「毛づくろい」や「皮膚感覚」にも通ずると言われると、なるほど、と合点がいきます。この点はさらに深めて追究したいところです。

しかし、逆の視点から見るともう一つおもしろいことに気づきます。「皮膚感覚」や、さらに遡った「毛づくろい」には、言語と同じくらしい微妙かつ効果的な表現力があるという。これも驚くべきことではないでしょうか。毛づくろいがコミュニケーションの道具だったのは約120万年前。そのメカニズムを想像するのは簡単ではありません。ヘアサロンでのシャンプールのときにシ^⑦福^{ふく}という人がいますが、あれが近いのでしょうか。他方、「皮膚感覚」という用語は今でもよく口にされ、何となく気になっているという人は多いかもしれません。傳田さんによれば、皮膚は情報を読み取ったりエネルギーを制御したりするたいへん賢い装置。いろいろなセンサーが埋め込まれており、光を感じることもできれば音もとらえられる。皮膚温の低下を通し

て、恋人の気持ちが冷めたことを見抜く人もいるそうです。

「毛づくろい」にしても「皮膚感覚」にしても、送り手と受け手がかかわる行為です。シグナルの読み取りが大事。しかし、それは機械的な信号の送受信ではありません。相手からのさまざまな信号が、快感や痛み、温度の感覚などともに伝えられる。いずれのコミュニケーションにおいてもセンサーの基盤となっているのは「心地良さ」です。そこからのずれ加減を通して、微妙なニュアンスが伝えられる。

言語は皮膚よりもっと洗練された装置です。不快からかなり自由になって、さまざまな情報を冷静に送ったり、読み取ったりできる。私たちが語学の習得というとき、とりわけ「スキル」といったことを話題にするとき、念頭に置いているのは感覚的な交流よりも、^①「**精密な情報のやり取り**」でしょう。当然のステップだとは思いますが。

しかし、私たちが言語を使うとき、不快から完全に自由なわけではありません。普段意識しているよりも見えにくい部分で、私たちのコミュニケーションには快不快がからむ。いわゆる情緒のやり取りが正面切って行われるような場（たとえば恋愛の場面など）だけではなく、ニュートラルに信号がやり取りされていると思えるような局面でも、「心地良さ」は重要な要因となっています。そこを見逃すと、言語習得のプロセスは偏ったものになり、うまくいかなくなる。

「心地良さ」と協調性

この「心地良さ」の機能を理解するには、ポール・グライスが示した「協調の原理」を参照すると役に立ちそうです。グライスは人間が他者と円滑なコミュニケーションを果たすために暗黙の約束をしていると考えました。具体的には、以下の四つの「公準」が共有されているとしたのです。

(1) 量の公準

会話を行う際、情報を過不足なく相手に提供すること。足りなくても、多すぎてもいけない。

(2) 質の公準

適切で確かな情報を与えなければならない。

(3) 関連性の公準

話題と関連することにしぼって言わなければならない。関係ないことを言っではいけない。

(4) 作法の公準

明瞭に話さなければならない。曖昧さは避ける。順序を追って簡潔に話す必要がある。

非常に合理的なコミュニケーション観です。「量」「質」「関連性」「明瞭さ」といった要素はいずれも情報伝達の効率性に照準をあてています。

しかし、このような一見、合理的に見えるコミュニケーションのモデルを想定したとしても、その周囲を取り巻くのは、合理性だけではとらえきれない人間の性癖でもあります。現実の場面を想像してみましよう。たとえば用事がある人に質問をしたときに、延々と関係のない話をされたとしたら、みなさんはどのように感じるでしょう。それを顔に表すかどうかは別として、多少イライラするのではないのでしょうか。あるいはパソコンのメールがうまく送れないのでソフトに詳しい人に原因を尋ねたところ、ことこまかにプログラムの成り立ちの説明をされてしまった。その場合はどうでしょう？ イライラではないかもしれませんが、「途方に暮れる」「不安になる」といったところでしょうか。

ここから見えてくるのは、たとえ「毛づくろい」ではなく言語によるコミュニケーションであっても、私たちはしばしばその成否を感覚的・情緒的にとらえるということです。効率性の高さや欠如に、「心地良さ」や「心地悪さ」という感覚を通して反応する。もちろん、私はそれを推奨しているわけではありません。相手の話が曖昧だったり、無関係のことばかりが延々と続い

たりするからといっていちいちイライラするのはよくない。なるべく冷静に対応するほうが、最終的にはコミュニケーションの成功に至る可能性が高そうです。しかし、私たちの心のメカニズムはそのようにはデザインされていないのです。もともとが愛撫の装置であったものを情報のやり取りに転用しているので、しばしば情緒的だったり感覚的だったりする部分が顔をのぞかせる。それがむしろ宿命だと言ってもいいでしょう。

逸脱の力

こう考えてくると、言葉との適切な付き合い方とはどのようなものがあらためて気になります。私たちはつい、言葉に合理性や効率性を期待する。論理や実用の名のもとに、機械のような正確さを要求してしまう。たしかに近代科学は、言葉を限りなく物の世界に近づけようとしてきました。そのことを通して人間は、物の世界を言葉的に理解できるようになった。これはすごいことです。

C1

、言葉は物の世界と完全に一致することはない。

C2

、そのことがむしろ言葉の可能性を保証しても

います。

C3

、言葉は物の世界から自由に虚構の世界をつくりあげることができる。私たちは言葉を使って嘘をつく

ことができるのです。あるいは今ある世界のあり方を批判して、新しい未来図を描くこともできる。また同一の表現なのに、正反対の二つの意味を持つこともできる。こうした言葉と物とのずれのおかげでこそ、人間は物のユウ位⑦に立てるとも言えます。

これに加えて重要なのが、私たちが透明で合理的だと思っている言葉の使い方にしっかりと「心地良さ」という要素が入り込んでいるといふことなのです。先ほどのグライスの公準では過不足のない「量」や、適切で確かな「質」という要素があげられています。しかし、誰もが知っているように、実際のコミュニケーションではしばしば過剰さや不足が横行します。

少し脱線になるかもしれませんが、ここで武田百合子さんというエッセイストの作品の一節を引用したいと思います。武田さんは小説家武田泰淳たいじゆんの妻でしたが、泰淳の死後、書きためていた日記を出版し、それが大人気となったのをきっかけに文筆家

として活躍するようになりました。その武田さんに『日日雑記』という日記風のエッセイをまとめた本があります。奇妙でおもしろい人物がいろいろ出てくるのですが、どの人にもリアリティがあつて、「ああこういう人、いるよねえ」と思わせられる。O氏はそんな一人です。

O氏は、「人間ちゃんとしつかりと食べとかなくちゃ」をくり返し、ひっきりなしに鍋の中をかきまわしては、黒くなるほど煮え震えている肉を、自分の分までせつせとくれたり、^{しわ}噎がれ声を張り上げて卵のお代わりを頼んでくれたりするので、私は十二分のもてなしをうけているな、と満足した。

料理屋で鍋を食べている様子が描かれているようです。引用したのはそのほんの一節ですが、たったこれだけの描写なのに、ここにはO氏という人の人柄が如実に表れています。どうしてそれほど人柄が伝わってくるのでしょうか。

そこで大きな意味を持つのが、O氏が同じことを何度も言ったり、同じこと（「ひっきりなしに鍋の中をかきまわしては」を何度もやったりする人だということです。O氏のそんな仕草を見ると、何となく人柄がわかったような気になる。しなくてもいいことや言わなくてもいいことを、こんなふうに過剰にするというだけで、その人の大事な部分が見えてくる。

グライスの公準に照らしてみると、「人間ちゃんとしつかりと食べとかなくちゃ」という、言っても言わなくてもいいような当たり前のことを何度も繰り返すというのは、チェックポイントの多くで×が付きそうです。「量」としては多すぎる。「質」としても適切でない。「関連性」もあやしい。唯一問題ないのは「曖昧さがない」ということだけでしょうか。

そんなO氏の様子を私たちはどう感じるでしょう。あるいはこの文章の書き手はどう考えているのか。「満足した」とあるので、基本的には D を持っているのでしょうか。ひよつとすると「少し面倒くさい」「そろそろいいよ」とも思っているかもしれませんが、他方で「この人はおもしろい」「もつと見ていたい」「一緒にいるとわりと楽しい」と思っている可能性もある。確実に言えるのは、O氏という人の過剰さにこの文章の書き手が強い印象を受け、その文章を読んでいる私たちも同じよう

な刺激を受けるといふことです。

現実には、私たちのコミュニケーションはこうした過剰さや過少さと直面することが非常に多いのではないのでしょうか。基本ルールとしてはグライスの公準にあるような合理性が前提とされているかもしれない。でも、私たちが人間関係を築く際、目を向けるのは、その人がどんなふう・に・ル・ル・ルから逸脱しているかということでもある。

そういう意味では、私たちはつねに非効率的で非合理的な部分に対するセンサーを起動させているのです。他者を見極め、自分にとってその人がどんな意味を持つかを判断するのにもっとも役に立つのは、この逸脱感知の仕組みなのですから。

「言葉を使わずに」どうにか

この例から見えてくるのは、私たちの言語運用が透明性や効率性を掲げながらも、実際にはそれとは別の原理にも動かされているということです。はつきり言葉にならない「モヤモヤ」の部分があるのです。とりわけ今見たような「過剰さ」は重要です。逸脱例の多くは、言葉が多すぎたり、言わなくていいことを言ったりといったことなので、自然、私たちは過剰さに敏感になります。平たい言い方をすれば、人間はつい言葉を使いすぎる。だから、その調整や見極めも必要になってくる。

あらためてこの章の冒頭で取り上げた「毛づくろい」や「皮膚感覚」のことを思い出してみましょう。こうした行為が「愛撫」として機能していたとするなら、そしてその延長上に言語というものがあるなら、言葉が過剰に使われる理由も理解できるかもしれません。

個人差があるとはいえ、私たち人間はついしなくてもいいことをするように作られています。その最たる例が「欲望」。私たちは必要以上のものを食べ、必要以上に眠り、必要以上に買い物をし、ときには必要以上に異性や同性に興味を持つ。そもそも生きるということ自体が、過剰さにまみれているのかもしれない。放っておいてもあふれ出してしまふようにして、自分の意思に関係なく、まずは生きてしまふのが人間。ときにはそれを制御したり方向を向け変えたりする必要も生ずる。我慢もする。

「放^Fっておいても生きてしまう」からこそ、ブレーキ機能がないと困るわけです。

私たちの言葉との付き合い方は、この宿命的な過剰さをぬきにしては語れないのです。私たちはどうしても過剰に愛してしまう。過剰に欲望してしまう。そして、そうした過剰さを反映するようにして、過剰に言葉を使ってしまう。だから、ちょうど他者の過剰な愛や欲望に敏感にならざるをえないのと同じように、過剰な言葉にも対応せざるをえない。しかし、そんなとき警戒したり、反発したり、嫌だと思うこともあるけれど、逆に過剰さに心地良さを感じたり、ほっとしたり、ときには涙が出るような思いになることもある。それが人間の文化というものです。

いずれにしても言葉の過剰さ^Gとどのように付き合うかは、言語運用のうえでは非常に重要です。言葉のルールを覚えるのと同じくらいのエネルギーを使って、その逸脱^Gの作法についても知っておく必要がある。人間同士がお互いの「モヤモヤ」した部分を理解しながらうまくやっていくためには、他者の過剰さの受け止め方に慣れておく必要があるのです。そのためにも「聞く」ことは大きな助けとなります。

「過剰さ」を聞く

では、他者の言葉の過剰さを受け止めるには、どのように「聞き方」を鍛えればいいのでしょうか。この問題はより根本的なりスニングの技術ともつながってきます。システムティックな訓練方法は本書の技術編で説明しますが、今、まず指^Eテク^Eしておきたいのは、どんな言語にも「強調」という作用があるということです。日本語にももちろんある。英語でも中国語でもスワヒリ語でもある。

しかし、言語によって「強調」との付き合い方は異なります。今、私たちが注目しようとしているのは英語なので、「強調」が英語でどんな機能を果たしているかを確認してみましょう。

まず少しでも英語の勉強をしたことがある人なら、英語にはストレス・アクセントという音声のシステムがあり、これが意味

を伝えるのに大きな役割を果たしているということを知っているでしょう。土台となるのは単語ごとのアクセント。語のどの音節にストレスがくるかが決まっています。

このレベルのストレスは、個人が「よし！ この音節を強く言おう」と勝手に決められるものではありませんが、個々のストレスの強さはあくまで相対的なもので、話者がストレスの部分で通常より強く言うとか、ストレスがない部分との差をことさらに引き立てて発声することで、何らかの「意図」を表現するといったことは可能です。

さて、こうした単語レベルのストレスの上には、フレーズ・レベルや文レベルのストレスや、さらにはパラグラフ・レベルでのストレスがあります。ここまでくると、明らかに話者の意図が反映されるようになります。話者は自分が伝えたい意味を強調するためにその場の必要に応じたストレスのバランスを自分の発話に盛り込むことになる。そこにはさらにイントネーションと呼ばれる抑ヨウもからんできますし、声量や顔つき、身振りなども効果を持ちます。

ということは、私たちにとって非常に重要なのは、そうした「強調」の身振りを耳や目でとらえ、話者の意図を理解することになります。そのためには何が必要か。答は明白でしょう。「強調」の身振りをとらえるためには、どこが「強調」されているか、そのポイントをしっかりとらえればよい。

しかし、そこが実は日本語話者にとっては最大のネックでもあるのです。まず日本語には、英語のようなストレス・アクセントのシステムはありません。だからストレスを通して単語の骨格を表現し、さらにはその土台の上に文単位、パラグラフ単位の強調のうねりを表現するという作法を私たちは知らないのです。

知らないなら学ばばいい、ということになるでしょう。しかし、それが難しいのです。英語リスニングの最大の困難は、この**ストレス・アクセント習得の困難から来ていると言っても過言ではありません。**

ここには二つの問題が同時にからんでいます。一つは、そもそも英語学習の過程でストレス・アクセントをうまく身につけられないことが大きな障害を引き起こしているということ。この基礎力の欠如が「聞く」ことだけではなく、「話す」ことにも悪影響を及ぼします。ストレス・アクセントを無視して言葉を発声しても、相手には伝わらない。もちろん相手の言っていること

もうまく聞き取れない。

しかし、このレベルとは別に、より奥の深い二つ目の問題もここではからんできます。この章では言葉の「心地良さ」と「過剰さ」との密接な関係をたどってきましたが、ストレス・アクセントを習得していなければ、英語ではどのような筋道で強調が行われるかも理解できないのです。

「奥の深い」と言ったのは、言語の運用が決して表層的な情報のやり取りには終わらないからです。言語運用をたどると「毛づくろい」があり「皮膚感覚」があり「愛撫」がある。情緒のやり取りは言葉のもっとも本質的な部分を構成します。だからこそ過剰さへの対応も必要となる。当然ながら、自分でも英語を通して過剰さを表出する必要があるでしょう。

ストレス・アクセントが身につけられなければ、言葉が「わかる」という基礎の部分が習得できないとともに、将来的には英語を通しての「過剰さ」や「心地良さ」の体験ができません。これでは英語の世界を生きることができません。それぐらいなら、情報のやり取りは通訳に頼ったり機械翻訳ですませたりしたほうがよほど効率がいいのではないでしょうか。

問1 傍線部Aの内容に合致しているのはどれか。最も適切なものを次から選べ。

14

- ① 「皮膚感覚」によるコミュニケーションは、哺乳類に共通した特徴である
- ② 人類は言語というコミュニケーションツールの習得によって、体毛を失った
- ③ 人類が「皮膚感覚」をコミュニケーションに使用していた期間は、言語のそれよりも長い
- ④ 約30万年前頃、既に人類は主に言語を使用してコミュニケーションを行っていた
- ⑤ 約200万年前、人類は「皮膚感覚」を通じてコミュニケーションを行っていた

問2 傍線部Bはどういうことか。最も適切なものを次から選べ。

15

- ① 快不快の感情でコミュニケーションの成否を判断しがちであるということ
- ② 効率性の有無でコミュニケーションの成否を判断しがちであるということ
- ③ 合理性の有無でコミュニケーションの成否を判断しがちであるということ
- ④ 愛情表現の仕方でコミュニケーションの成否を判断しがちであるということ
- ⑤ 曖昧さの有無でコミュニケーションの成否を判断しがちであるということ

問3 空欄C1からC3には、次のイからハの接続詞が入る。その順番として、最も適切なものを次から選べ。

16

イ そして

ロ たとえば

ハ しかし

C1 C2 C3

- ① イーロハ
- ② イーハロ
- ③ ロイーハ
- ④ ハーロイ
- ⑤ ハーイロ

問4 空欄Dに入るものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

17

① 嫌悪

② 好奇心

③ 好意

④ 共感

⑤ 困惑

問5 傍線部Eの意味として、最も適切なものを次から選べ。

18

① 正確性

② 非合理性

③ 不確実性

④ 非適合性

⑤ 明瞭性

問6 傍線部Fの意味として、最も適切なものを次から選べ。

19

① 人間の行動が過剰であることは、問題にはならないということ

② 人間の行動が過剰であることは、生きるために必要だということ

③ 人間は、動物や植物と同様に命を持っているということ

④ 人間は、自然に過剰な行動をしがちであるということ

⑤ 人間の過剰さは、特別な条件で生じるとのこと

問7 傍線部Gの意味として、最も適切なものを次から選べ。

20

- ① ポール・グライスが示した「作法の公準」
- ② 過剰になりがちな言葉の調整や見極め
- ③ 他者が使用する言葉の味わい方
- ④ 他者の過剰な言葉への警戒の仕方
- ⑤ 自身の過剰な愛や欲望のコントロール

問8 傍線部Hの意味として、最も適切なものを次から選べ。

21

- ① 情緒のやり取りは、コミュニケーション装置としての皮膚を持つ人類に固有の活動であるということ
- ② 情緒のやり取りは、言葉が「毛づくろい」からひきついできた不可避の部分であるということ
- ③ 情緒のやり取りは、人が言語を使用することによって発達した高度な部分であるということ
- ④ 情緒のやり取りは、「毛づくろい」をしていた時代にはない、皮膚がもたらした機能であるということ
- ⑤ 情緒のやり取りは、習得に時間が必要な、その人の努力が表れやすい部分であるということ

問9 著者の考えと合致するものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

22

- ① 人がコミュニケーションを円滑にするためには、言語を支配している基準に特に注目する必要がある
- ② 人が生きることが過剰なものなので、人はコミュニケーションの中での過剰さに寛容である
- ③ 人のコミュニケーションの中では、合理性を超えて逸脱している部分が意図の理解に役に立つ
- ④ 人の本質が現れやすいのはルールから逸脱した部分だが、人間関係を築く際には不要なものである
- ⑤ 人が行うコミュニケーションは現実と完全に一致することはなく、そのことが相互理解を妨げている

問10 文中の二重傍線部⑦から⑩のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から選べ。

- | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|----------|---|------------|---|----------|
| 23 | ⑦ | — | ① | 紳シ的な態度 | ② | 夏シが来た | ③ | 一シを報いる |
| | | | ④ | 株式シ況 | ⑤ | ワインのシ飲 | | |
| 24 | ① | — | ① | 精チな描写 | ② | 羞チ心のない人 | ③ | サケのチ魚 |
| | | | ④ | 言チを取る | ⑤ | 仕事チ滞する | | |
| 25 | ① | — | ① | お金をユウ通する | ② | 原油がユウ出する | ③ | 企業をユウ致する |
| | | | ④ | ユウ美な曲線 | ⑤ | 支払いをユウ予する | | |
| 26 | ① | — | ① | 点テキを受ける | ② | 警テキを鳴らす | ③ | 端テキな表現 |
| | | | ④ | 密輸のテキ発 | ⑤ | 実力が匹テキした二人 | | |
| 27 | ① | — | ① | 民族舞ヨウの衣装 | ② | 善行を称ヨウする | ③ | 人権ヨウ護 |
| | | | ④ | 童ヨウを歌う | ⑤ | 許ヨウ範囲 | | |